

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 20 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520013

研究課題名(和文)ハイデッガー、西田、西谷の「場所論的思惟」の立場からする「技術知」の検討

研究課題名(英文) A philosophical approach to "technological knowledge" from the standpoint of "topological thinking" in Heidegger's, Nishida's or Nishitani's works

研究代表者

秋富 克哉 (Akitomi, Katsuya)

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・教授

研究者番号：80263169

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：今日、世界的問題になっている科学技術について哲学的考察の可能性を探るため、この主題に独自の哲学的アプローチを行っている代表的な哲学者として、マルティン・ハイデッガー、西田幾多郎、西谷啓治を取り上げ、技術という主題がどのような観点からどのように論じられているかを考察した。科学技術に対する三者のスタンスは異なっているが、本研究は、三者に通じる哲学的知を広義の「場所論的思惟」として踏まえ、この観点から三者の思想的内実を取り出して相互の連関を探り、その現代的意義を考察した。
研究成果は複数の論文や発表で公開し、例年ドイツに出張して発表や報告を行うとともに、海外研究者との研究交流を押し進めた。

研究成果の概要(英文)： Today, problems of technology have been discussed all over the world. To explore the possibility of a philosophical approach to technology or "technological knowledge", I first characterized Martin Heidegger, Kitaro Nishida and Kiji Nishitani as the philosophers who have addressed this theme from their own standpoints, and then revealed their respective treatments on this issue. The current study has not only argued that in spite of their differences in stance on technology, their "philosophical knowledge" shares the same "topological thinking" in a wide sense, but also discussed in detail how their philosophical thoughts of technology are mutually related and what their contemporary meaning is.

All the results have been presented through written papers, books and presentations. Every year I made a research trip to Germany in order to interact with foreign researchers and to collect important information and materials on this research.

研究分野：哲学

キーワード：技術 場所 ハイデッガー 西田幾多郎 西谷啓治

1. 研究開始当初の背景

(1) 一般的な研究状況

本研究が取り上げる3人の哲学者のうち、ハイデッガーについては国内外で膨大な研究の蓄積があるうえに今なお盛んに研究されており、西田については国内の研究の活潑化とともに国外でも研究が広まりつつある。西谷については国内外で少しずつ研究が現れ始めているものの、前二者に比べると研究の進展は遅い。三者に共通する技術という主題については、ハイデッガーや西田の個別的研究が見出せるものの、他の主題に比べるとまだまだ未展開であり、まして三者の立場を付き合わせてその可能性を吟味する試みはほとんど着手されていない。

(2) 申請者の研究状況

ハイデッガーの技術論についての学位論文を公刊して後、この主題を発展させるなかで、もともと取り組んでいた西田と西谷の哲学を、同じく現代世界における技術という観点から考察し、ハイデッガーの立場と比較対照することを目論んでいた。申請に先立って、ハイデッガーと西谷の比較考察を行ったことから、西田を軸に据える必要と可能性を強く感じるようになり、これら三者を並べるなかから、本研究の主題が明らかになった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大きく以下の2つの方向に分けられた。

(1) 三者それぞれの哲学的研究

ハイデッガー、西田、西谷三者それぞれの思想を、近代的主観性の立場の克服という観点から「場所論的思惟」として捉え、それぞれの思想的立場の内実を吟味することが第一の目的である。

(2) 三者の思想の比較対照と総合

三者それぞれの「場所論的思惟」において、技術という主題がどのように取り込まれているか、その方法論的特色と内実を考察する。そこから、それぞれの思想を照らし合わせることで、相互の思想の可能性を明らかにし、最終的には、現代世界において技術を哲学的に論じる地平を目指す。

3. 研究の方法

(1) テキスト読解

研究の基本的姿勢は、三者それぞれの原典テキストの読解である。三者の主要テキストは一通り読解しているが、ハイデッガーについては今なお全集が刊行継続中のうえ、西田・西谷の著作についてもまだ目を通していないものが少なくないため、まずは本研究の主題を軸に、関連するテキストの読解と再検討が中心となる。とりわけハイデッガー全集の新刊は、出版されるごとに内容を検討することが不可欠である。

(2) 関連研究の情報収集

三者について、程度の差はあれ、新しい研究や特集雑誌等が次々に刊行中であり、先行研究も少なくないため、それらを収集し、検討することが(1)に継ぐ方法となる。特に、他の様々な主題に比較して技術という主題は新しく、今日的な技術哲学の議論との突き合せも求められるので、国内外における研究動向に目を配ることが求められる。

(3) 研究成果の公開

研究成果は、そのつど日本語と外国語での論文や口頭発表を通して積極的に発信していく。

4. 研究成果

研究成果の大まかな特徴を、次項5の個別の具体的業績を列記させる仕方で説明することとする。

(1) 西田と西谷の場所論と技術論の検討

西田と西谷それぞれの「場所論」の立場を考察しながら、科学や技術の主題化が、特に宗教哲学的主題との連関においてなされていることを取り出そうと試みた。西田が「絶対無の場所」を基礎にして場所的論理を明確に打ち出すのに対し、西谷は「空」を場所的に捉えつつも、必ずしも論理を主題化しないため、両者の思想を場所論的思惟として捉えることには大きな注意を要する。西田については、前期から中期にかけての思想の展開（純粹経験・自覚・場所）を踏まえ、そのなかでの技術理解の変化を概観した。また、西谷については、「虚無と空」の思想連関のなかで吟味される技術の位置づけを確認し、さらに「禅と科学」という西谷独自の視点を欧語論文で考察した。それぞれの思想的立場は明瞭になったが、上記のように、西谷における場所について、特に西田と比較した場合「論理」ということをどのように受け止めるかは、改めて大きな課題となったと言わざるを得ない。ただし両者の違いを明らかに照らし出すのも、技術に対する両者のスタンスの違いであることが明らかになった（雑誌論文、学会発表）。

(2) ハイデッガーと西谷の比較

技術論を軸とするハイデッガーの思想を、西谷の思想との比較のもと考察した。一つは、ニヒリズムという観点から両者の思想を論じてドイツ語論文で発表、特に西谷のハイデッガー理解を踏まえ、そこから両者の思想の共通性と相違性を取り出した。さらに、「技術的世界に住む」という観点から、両者の「場所」の思想に触れながら、ハイデッガーが「禅について」の講座シリーズ（『講座禅』、筑摩書房、1967-1974）に寄稿した講演録とそれに対する西谷のコメント、および西谷の別の論考をもとに、両者の立場を比較検討した（雑誌論文、図書）。

(3) ハイデッガーの技術論

日本宗教学会が会誌『宗教研究』の特集として組んだ「科学・技術と宗教」に、依頼論文として、ハイデッガーの技術論についての論考を発表した。ハイデッガーの技術論の特徴を概観するとともに、宗教学的の研究ということに特に意識して、現代技術的世界においてどのような可能性が考えられるかという観点から、ハイデッガーの思想が宗教と最も触れ合いうると思われる思想「放下による平静さ (Gelassenheit)」を取り上げ、その思想的内実を考察した(雑誌論文)。

(4) ハイデッガーのギリシア悲劇論

ハイデッガーの技術理解を従来の研究と少し異なる観点から照らし出すため、テクノロジーの源流である「テクネー」理解に現れる古代ギリシア観を、とりわけギリシア悲劇理解に定位して考察した。一見技術という主題から離れたように映るが、アイスキュロスやソポクレスに言及するハイデッガーの洞察の根底には、技術と自然の関係を歴史的射程のもとに考察しようとする明確な意図がある。また、ハイデッガーがギリシア悲劇を論じる際に引き合いに出す詩人ヘルダーリンの解釈には、「場所」に対するハイデッガー自身の固有な洞察が認められる。このような意味で、ハイデッガーのギリシア悲劇論の考察は、数ある主題の中の周辺的なテーマということに尽きず、むしろ現代技術世界の諸課題との連関のなかで掘り下げられるべきものであるという確信を持っているし、またその確信を強められたと思っている。ただし、場所論的思惟との連関ということについては全貌を明らかにし得たとは言えず、むしろ新たな課題を得るに至った(雑誌論文、学会発表)。

(5) ハイデッガーと西田の比較

公刊は 2015 年度に持ち越されることになったが、西田とハイデッガーの場所論の比較に向かう論考を 2014 年度後半に執筆した(2015 年 4 月 30 日公刊)。ハイデッガーと西田というテーマは、今後西洋と日本との思想交流のなかで重要度を増すことが予想される。国内にわずかに見られる先行研究では、時代的制約ゆえに不十分ながら西田がハイデッガーに触れている箇所をもとに、その批判を検討しながら両者の関係を扱うのが主流であった。しかし、今回の論考では、先行研究との違いを出すため、両者の哲学的出発点のうちに強く重なり合う思想的契機を見出し、その立場の比較を徹底することで逆に見えてくる両者の相違点を照らし出そうと試みた。今後も続編を執筆する予定である。

(6) 欧文での論文執筆と発表・報告

ドイツ出張の際に研究発表を行った以外にも、セミナーでの報告を担当するなどした。特に 2 年目にドイツ・ハノーヴァー哲学研究

所のコロキウムで行った講演録は、福島での原発事故を取り上げて、この事態にハイデッガーの技術論がどのように関わりうるかを検討しながら、さらにこの事故をどのように受け止めるべきか、哲学的技術論の可能性を探るという意図のもとに考察を行った。当該研究所の HP に掲載されたことで、海外からの問い合わせがメールで数件寄せられるなどの反響があった(雑誌論文、学会発表、図書)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計 9 件)

AKITOMI, Katsuya, "On the possibility of discussing technology from the standpoint of Nishitani Keiji's religious philosophy", Katsuya Akitomi, The Journal of Japanese Philosophy, Vol. 2, Suny Press, 査読有, 2014, 57-73

秋富克哉、「科学と宗教 西谷啓治の立場から」、秋富克哉、大谷大学宗教学会編『宗教学会報』、査読無、第 19 号、2014、1-26

秋富克哉、「純粹経験から行為的直観へ技術が問われるところ」、西田哲学会編『西田哲学年報』、第 11 号、査読無、2014、32-43

AKITOMI, Katsuya, „Heidegger und Nishitani - Über den Nihilismus“, Katsuya Akitomi, Heidegger-Jahrbuch 7. Heidegger und das ostasiatische Denken, hrsg. von Alfred Debker und Holger Zaborowski, Verlag Karl Alber, 査読無, 2013, 283-301

秋富克哉、「『アンティゴネー』の合唱歌をめぐる一試論 ハイデッガーのソポクレス解釈(2)」、日独文化研究所年報『文明と哲学』第 5 号、査読無、2013、120-135

秋富克哉、「技術時代に死すべき者たちとしてこの大地の上に住む ハイデッガーの技術論再考」、日本宗教学会編『宗教研究』、第 87 巻、377 号、査読無、2013、3-30

秋富克哉、「西谷啓治のニイチエ解釈」、『理想』(理想社)第 689 号、査読無、2012、62-73

秋富克哉、「この地上に住むということ ハイデッガーと西谷啓治」、西田哲学研究会編『場所』第 11 号、査読無、2012、1-19

秋富克哉、「オイディプスの一つ多過ぎた眼 ハイデッガーのソポクレス解釈」、日独文化研究所編『文明と哲学』第 4 号、査読無、2012、86-101

〔学会発表〕(計5件)

秋富克哉、「ハイデッガーとギリシア悲劇
ソポクレス解釈をめぐって」、関西哲学
会第67回大会、2014年10月26日、関西学
院大学(兵庫県西宮市)

AKITOMI, Katsuya, „Kerntechnik denken
- In Bezug auf die Diskussion der
Technik bei Heidegger“, ドイツ・ハノー
ヴァー哲学研究所コロキウム、2013年10
月23日、ハノーヴァー市(ドイツ)

秋富克哉、「西田哲学における悲哀につ
いて」、日本宗教学会第73回学術大会個
人研究発表、2014年9月11日、同志社大学(京
都市)

秋富克哉、「西田哲学と「悲哀」」、日
本宗教学会第72回学術大会個人研究発
表、2013年9月7日、國學院大学(東京都)

秋富克哉、「前期西田哲学における意識
の問題」、日本宗教学会第71回学術大会
個人研究発表、2012年9月8日、皇學館大
学(三重県伊勢市)

〔図書〕(計2件)

秋富克哉他、『ハイデガー読本』、法政大学
出版局、全406頁、2014

AKITOMI, Katsuya etc., Kitaro Nishida in
der Philosophie des 20. Jahrhunderts,
Verlag Karl Alber, 全493頁、2014

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

秋富克哉(AKITOMI, Katsuya)
京都工芸繊維大学・大学院工芸科学研究
科・教授
研究者番号：80263169

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：